Christmas Songs Ⅱ
クリスマス・ソングスII

Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ

1. もろびとこぞりて
Joy To The World《Trad》(4:08)
2. まきびと羊を
The First Noel《Trad》(5:31)
3. あめなる神には
It Came Upon A Midnight Clear《R. S. Willis》(4:00)
4. オー・カム、オー・カム・エマニエル
O Come, O Come, Emmanuel《T. Helmore》(3:58)
5. 良き王ウェンセスラス
Good King Wenceslas《Trad》(3:20)
6. われら三人東の王
We Three Kings Of Orient Are《J. Hopkins》(4:26)
7. クリスマスおめでとう
We Wish You A Merry Christmas《Trad》(3:24)
8. あめにはさかえ
Hark! The Herald Angels Sing《F. Mendelssohn》(3:41)
9. ウィンター・ドリームス
Winter Dreams《E. Higgins》(4:54)
10. リトル・ドラマー・ボーイ
The Little Drummer Boy《H. Simeone》(2:52)
～Bonus Tracks～
11. きよしこの夜*
Silent Night《F. X. Gruber》(5:36)
12. ジングル・ベル*
Jingle Bells《J. S. Pierpont》(6:29)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins《piano》
ジョージ・ムラツ George Mraz《bass》
ベン・ライリー Ben Riley《drums》
〈スペシャル・ゲスト〉スコット・ハミルトン Scott Hamilton《tenor sax》*

録音：2006年5月24日ザ・スタジオ、ニューヨーク

Ⓟ©2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on May 24, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Cover Art : © Meredith D'Ambrosio
Designed by Taz

ヴィーナスレコードを代表する看板アーティスト、そして今では日本で最も人気の あるジャズ・ピアニストのひとりとなったエディ・ヒギンズ。2004年11月、ヒギンズはクリスマス・アルバム『クリスマス・ソングス』をリリースした。その続編『クリスマス・ソングスII』の登場である。

前作はジェイ・レオンハート(ベース)、ジョー・アシオーネ(ドラム)からなるピアノ・トリオでの録音。今回はジョージ・ムラーツ(ベース)、ベン・ライリー(ドラム)という2人のベテランを迎えた。さらに、エディ・ヒギンズとのコラボレーションで もおなじみのテナー・サックス奏者、スコット・ハミルトンが2曲でゲスト参加した。ちなみに、前回のクリスマス・アルバム同様、アルバム・ジャケットの絵画は、有名なジャズ・シンガーで画家でもあるメレディス・ダンブロッシオが描いたもの。メレディスはヒギンズの奥さんでもあり、2人はステージでしばしば共演している。

収録曲は今回もよく知られたクリスマス・ソングが取りあげられている。前回は、「ホワイト・クリスマス」「クリスマス・ソング」「ウインター・ワンダーランド」などの定番曲が収録されていた。今回も「きよしこの夜」「もろびとこぞりて」「まきびと羊を」などが収録されている。前回も今回も、おなじみの人気曲が楽しめるわけだが、全体の傾向としては、前回がポピュラー・ソングとしても知られる曲が多いの対し、今回は賛美歌としても知られる曲が多い。そのこともあって、今回は聖夜の雰囲気がより出ているように思う。

エディ・ヒギンズはスタンダード・ソングの達人である。名曲のもつ魅力を引き出し、優雅でジェントルにスイングするヒギンズのピアノ・スタイルで聴かせてくれる。それはジャズ・スタンダードでも、ミュージカルの歌曲でも、そしてクリスマス・ソングでも同じだ。誰もが知っているような名曲を取りあげて、魅力ある演奏を聴かせるのはたやすいことではない。過去に名演がたくさんあることはプレッシャーになる。しかし、自分の個性やスタイルをもつアーティストにはそのことは苦にならない。自分の演奏をすればいいからである。つまり、よく知られる有名なナンバーの名演を残せるのは、自分の個性やスタイルをもっていることの証明といえる。ヒギンズが決して多くはないその優れたジャズ・ピアニストのひとりであることは言うまでもない。

エディ・ヒギンズの演奏は、原曲のメロディーを大切にし、アドリブに移ってから も原曲のイメージを反映させたり変奏的なフレーズをはさんだりする。ジャズの場合、アドリブになれば別の曲のようになってしまい、それでは選曲の意味がないと思われる演奏も少なくない。もちろん、そういう演奏の中にも名演がある。その場合、選曲はあまり意味をもっていないのだろう。しかし、選曲、そして原曲のテーマ演奏 も、それに関連したアドリブも素晴らしいものを目指すアーティストもたくさんいる。ヒギンズはその代表的なアーティストである。このクリスマス・ソング集においても、ヒギンズの演奏は、アドリブに移ってからも原曲のイメージを大切にしており、そこから大きく逸脱することはない。スタンダード・ナンバーの演奏のよきお手本である。

また、このアルバムでは、日本人のよく知るクリスマス・ソングを取りあげてくれていることがうれしい。日本のヴィーナスレコードの制作なので、その点、やはり日 本人の好みに合っているのだ。ジャズ系のクリスマス・アルバムは珍しくない。毎年のようにこの時期になれば話題になる。しかし、選曲になじみのない曲が多かったりすると、クリスマス・アルバムとしてはちょっと楽しめなくなってしまう。聴いたこ とのないクリスマス・ソングを知るのも知識が広まってわるくはないのだが、やはり、じっさいのクリスマスにはこのようなよく知っている定番曲が聴きたくなってくる。そうでないと、クリスマスを迎えた気がしないのである。日本のクリスマスは、ファッション的に盛り上がりすぎのような気もするが、家族や恋人と静かで心温まるクリスマスを過ごす人も多いだろう。エディ・ヒギンズのこのクリスマス・アルバムは、そんな年に一度の大切な時間にかけたい作品である。

〈もろびとこぞりて〉

18世紀にヘンデルの「救世主」の中のメロディーをローウェル・メイスンが編曲した。歌詞はアイザック・ワッツ。主題の演奏後、エディ・ヒギンズがみせる賛美歌風のフレーズを織り交ぜたアドリブが興味深い。

〈まきびと羊を〉

英国で生まれたトラディショナル・ソング。最初の出版は1833年だったが、13～14世紀にフランス(英国説もあり)で作られたといわれる。エディ・ヒギンズの情感をたたえたスローな演奏に惹き付けられる。

〈あめなる神には〉

1850年に牧師のエドモント・ハミルトン・シアーズが作詞、作曲家リチャード・ストーズ・ウィリスが作曲したアメリカ生まれの賛美歌。エディ・ヒギンズ・トリオは ジャズのスタンダード・ナンバーのようなアドリブをみせる。

〈オー・カム・オー・カム・エマニエル〉

1851年にロンドンのジョン・メイスン・ニールが、9世紀のラテン語聖歌を英語に翻訳した。1856年に合唱指揮者のトーマス・ヘルモアが現在の形にアレンジした。賛美歌「久しく待ちにし」としても知られる。エディ・ヒギンズのピアノ、ジョージ・ムラーツのアルコ・ベースが主題を奏でた後、ジャズ・ナンバーのような展開に自然 と移行する。

〈良き王ウェンセスラス〉

フィンランド語の聖歌集の1曲にジョン・メイスン・ニールが19世紀の半ば頃、英語詞を付けた。ウェンセスラスは10世紀のボヘミア(今のチェコ)の王様で、貧しい人々に食べ物を施すなどの善行をした。この曲も途中からジャジーなピアノ・トリオ演奏へ移行する。それでいて原曲のイメージから大きく離れることはない。

〈われら三人東の王〉

1857年にアメリカの牧師ジョン・ヘンリー・ホプキンスが作詞作曲した。日本では　賛美歌「われらはきたりぬ(三人の博士)」としても知られる。マイルス・デイビス参加の珍しい録音を含むジャズ・バージョンの多い曲でもある。エディ・ヒギンズ・トリオの演奏もジャズ・ナンバーのようにスイングしている。ヒギンズは原曲の断片を使いながらイマジナティブなアドリブを聴かせる。

〈クリスマスおめでとう〉

英国のトラディショナル・ソング。16世紀の作品といわれる。楽しくあたたかい曲であり、エディ・ヒギンズ・トリオもファンキーなノリもみせながらハッピーな演奏 を展開する。

〈あめにはさかえ〉

原曲はメンデルスゾーンが作曲した祝典歌の「Festgesang」。1855年にウイリアム・ヘイマン・カミングスが編曲、チャールズ・ウェスリーが作詞を加えてこの賛美歌になった。ここでは意外性に富んだボサノバ・タッチのアレンジで演奏されている。

〈ウィンター・ドリームス〉

これはエディ・ヒギンズが作曲したクリスマス・アルバムのためのオリジナル。キャロルの雰囲気も感じさせるファンタジックなナンバーである。

〈リトル・ドラマー・ボーイ〉

アメリカのハリー・シメオン合唱団のヒットで有名になったクリスマス・ナンバー。合唱指揮者のシメオンらが1958年に共作した。キリストの誕生を祝う贈り物のない貧しい少年が、太鼓を叩いて祝う曲だ。曲にちなんでいろんなリズムのバージョンが録音されている。ここでもベン・ライリーのマーチ風のリズムにピアノとベースが絶妙なコラボレートをみせている。

〈きよしこの夜〉*

「聖夜」としても知られるおなじみのクリスマス・ソング。19世紀の初めにザルツブルクでヨゼフ・モーアが作詞、フランツ・グルーバーが作曲。英訳詞はジョン・フリーマン・ヤングが書いた。この曲ではトリオにテナー・サックスのスコット・ハミ ルトンが加わり、ロマンティックでムーディーなサックス・プレイを聴かせる。

〈ジングル・ベル〉*

クリスマス・シーズンになれば世界中の街角で流れるこの曲は、1857年にアメリカの作曲家ジェームス・ピアポントが作詞作曲した。ボストンの馬ぞり競争の情景を描写したナンバーで、最初の曲名は「The One Horse Open Sleigh」だった。2年後に 「ジングル・ベル」に変えられた。ゲストのテナー・サックス奏者スコットハミルトンが加わり、スインギーで軽快なセッションをくり広げる。ハミルトンのソロは貫禄十分だ。

(高井信成)